



ajirochaya

連載 | これからのランドスケープの仕事

人がつくる新しい風景をつくる

Envisioning New Folk Landscape

三島 由樹 *Yoshiki MISHIMA*

株式会社 Folk
F O L K Inc.

08

みどり色以外の色々

フォルクというデザインオフィスを立ち上げて3年目、「三島くんってほんとか色々やってるよね」と言われることが最近多い。それはお褒めの言葉の場合もあれば、なんとなくお褒めでない言葉の場合もある。言われてみて振り返ると、庭や広場など公私空間の設計、植栽管理、まちづくり、グラフィック、アーバンデザイン、マスタープランニング、プレイスメイキング、コミュニティデザイン、学生ワークショップ、大学非常勤教員と、色々な仕事と人々に国内外で関わらせていただきながら、オフィスを経営している。実感としてはいわゆるランドスケープらしい「みどり色」な仕事が半分、ランドスケープらしくない「色々な仕事」が半分というところである。特に意識してこうなっているかというところではなく、自然とこうなっている。この意味で冒頭のお褒めでない言（ランドスケープらしいみどり色の仕事に集中しなさい）は正当なものであるが、一方で、このように色々な仕事をしていると、別々のスキルや経験を組み合わせられた仕事が出来るようになり、点ではなく線や面で仕事を考えられるようになる。こうして仕事の色数が増えていくのであるが、関心が拡散していくというよりも、方向性を持ってネットワークされていく感覚があって面白い。みどり色以外の色々をつなげたり束ねて仕事をするスタイルは、オープンエンドなランドスケープ分野のポテンシャルであると感じている。

職能を目指さなくてもいい

色々な仕事をする中で当初決めかねたのは自身の職能の伝え方である。自分がアメリカでトレーニングを受けた専門はランドスケープ・アーキテクチャーであるが、この分野の公称である「ランドスケープ・アーキテクト」は一般の方にはまず直感理解が得られない。そこで、職能については名乗ることなく（名刺にも書かず）、「こういうことをやっています」とその場に適した仕事の内容を相手に伝え、スライドやウェブサイトで過去のプロジェクトを見てもらうことにしている。それが最も誤解が少なく、共感を得やすい。SNS等で個人の様々な活動がオープンに伝わりやすい環境が整っている今日では、「自分の職能は～である」と言わずとも、「自分は～をしてきた（している）」ことを伝える方が重要であろうし、仕事の可能性を広げてくれる気がしている。最近の学生さんの

多くは「将来何になりたいか分からない」と言う人が少なくないが、それはむしろ今時のまっとうな感覚であると思っている。何になりたいか無理矢理考えて納得したふりをするよりも、どんな生き方をしていたいか、どんな人と仕事をしていたか、どんなプロジェクトに取り組みたいかというイメージさえあれば、必ずしも職能を語る必要はない時代ではないかと思うのである。

人がつくるものの美しさ

私は、いわゆるランドスケープデザイナーとして「みどり」や「場」を自分がデザインすることが重要な仕事のひとつであると思う一方で、人々が日々のいとなみの中で作りあげてきた生活や風景の美しさには到底敵わないと感じている。だが、デザインすることが決して嫌なのではなく、ただ人々がつくるものを愛でたいだけでもない。地域の人、環境、文化を読み込みながら、自分も地域の人たちと一緒に人のつくる風景をつくりたいと思っている。

このように考えるようになったのは、自身が学生のころから、いわゆるデザイナーがつくるカッコイイものよりも、民芸や民話、集落の風景など、人という生き物の集合知がつくってきたものが持つ、さりげなくも圧倒的な美しさに惹かれていたことや、宮本常一のように、地域の人たちに惜しみない敬意を持って接しながらミクロとマクロの視点を持って仕事をする世間師のようなプロに憧れていたからであろうと思う。フォルク（FOLK：人、民俗）という名前をオフィスにつけたのは、このように「人」に対して向き合い、考え、つくる人々と共につくる仕事をしていきたいと考えたからであった。

園芸文化を通じた地域づくり

人がつくる風景への関心を直接表現した最初のプロジェクトは、私が現在暮らす谷根千エリアにおける路上園芸を通じた地域づくりのプロジェクト「Tokyo Street Garden」である。これは当初数人の友人たちとスタートした、自主研究のようなプロジェクトであったが、それまではただ見て愛でていた路上の園芸を文化としてリサーチして掘り下げ、路上の植物のオーナーに話を聞き、植木をお借りして展示やマーケットなどのイベントを地域で行っているうちに、土着的な園芸文化・園芸外交をツールとしたコミュニティづくりに大きな魅

力と可能性を感じるようになった。また、私たちはまちの路上園芸を通じて、ただ植物自体を見ているのではなく、それをつくり、育てている人々の気配やふるまいを間接的に感じているのであるということも大切な発見であった。

いとなみが見える土間のような庭

その後、Tokyo Street Garden で得た気づきをベースに、網代園（八王子）、桜緑荘（上野桜木）、TAYORI（谷中）という場所に小さな庭をつくる機会があった。これらのデザインでは「人のつくる風景をつくる」ということ、つまり庭だけではなく、庭とともにある人が感じられるようなデザインができないか考えた。これらの庭は、新設ではなく旧庭のリノベーションであることから、旧庭の素材を使い直してデザインは極力シンプルにすること、庭の中の人のいとなみが外から見えるように塀等を取り払い、水やりや植物の手入れなどの庭手間を通じて周辺コミュニティとの関係作りが自然と行われることを目指した。できた庭自体は、地味であたかも昔からある庭に見えるのであるが、庭の中で人が庭の世話をしているのが見えるだけで、まちの空気がぐっと明るくなるように感じた。以前、日本における「庭」の語源は、「土間」であったということを知った時、自分のつくりたい場のイメージが一気に明確になった感覚を得たことを覚えている。鑑賞するための庭ではなく、生活にまつわるふるまいやコミュニケーションを支える基盤としての庭、人が人として生きて行く術を身につけられる場としての庭である。このような多様な人のいとなみが可視化された小さな庭がちりばめられた街の風景を想像しながら、これからも街の生活文化基盤としての庭づくりを少しずつしていきたい。

てづくりとまちづくり

3つ目の事例は、石川県の金沢市袋板屋町と加賀市で取り組んでいる2つのまちづくりのプロジェクトである。まちづくりと言っても、私がデザインするのではなく、学生と地域住民の協働をコーディネートしている、と言いたいところであるが、それだけでは面白くなく、実際のところプレイヤー兼コーディネーターのようにバタバタと立ち回っている。これら2つのプロジェクトでは、全国からSNSで募集した大学生が、地域に滞在しながら地域住民と協働するという点では

共通しているが、金沢市袋板屋町では、市で進められている立地適正化計画を背景として集約されていく街のちょうど外側にある、どこにでもありそうな小さい街のヴィジョンとプランを自前で作る活動を行っている、一方、加賀市で取り組んでいる PLUS KAGA Project では、学生が地域課題の解決に資するプロジェクトを一人で立ち上げ、地域住民と連携して実施していく活動を多地域同時多発型で行っている。まちづくりとは、まち「を」つくることのように聞こえるけれども、より大切なのは、てづくりが手「で」つくることを意味するように、まちづくりも、まち「で」つくる状況をいかにつくるかである。私たちが、近代以前につくられた集落や伝統的な祭事などに感動するのは、やはりそれらが多数の人々の総意による「まちでつくられた」ものであると直感的に認識できるからであると思う。

ランドスケープについて考えること

本稿のテーマである「これからのランドスケープの仕事」について、私もアメリカから日本に帰ってきた時に一度考えたことがある。しかし、これからのランドスケープの仕事を考えようとすると、雑誌や本に載っているキーワードばかり思い浮かんでしまうため、ランドスケープの根源的な意味とは何か考えようと、この分野の出処の一つである F.L. オルムステッド関連の本を読み漁ったことがある。そこでは、ランドスケープという分野をつくろうとした当時の社会に対する強烈な問題意識であったり、後年時勢の変化に伴いランドスケープ・アーキテクトからジオ・アーキテクトへの職能の移行についてオルムステッド自身が考えていたりしたことが書いてあり、ランドスケープという言葉やランドスケープの仕事という領域の中で仕事を考えることから自分が解放された気がしたのを覚えている。

これからもランドスケープ分野は発展存続していくであろうし、私も自分の背骨をつくってくれたこの分野の発展に少しでも貢献できたらと願っている。しかし、だからこそ、この分野の枠組みを横目に見ながら発想するのではなく、一人一人が身の回りの社会を直視し、丁寧な読み込みを行った上で、なすべき仕事を自由に、根源的に思考すべきであると思う。それこそがランドスケープ分野という極めて動的かつ社会に密着した分野の本来の姿であろうと考えている。

略歴：1979年東京八王子生まれ，慶應義塾大学環境情報学部卒業。ハーバード大学大学院ランドスケープ・アーキテクチャー学科修了。マイケル・ヴァン・ヴァルケンバーグ・アソシエーツ，東京大学大学院博士課程単位取得退学，東京大

学大学院工学系研究科都市工学専攻特別助教を経て，2015年株式会社folkを設立。現在，慶應義塾大学，千葉大学，東京大学，日本女子大学，前橋工科大学にて非常勤講師を務める。

